

ペルシャ湾岸地域の近現代史研究

著者	佐藤 尚平
雑誌名	歴史と地理．世界史の研究
号	237
ページ	48-51
発行年	2013-11-20
URL	http://hdl.handle.net/2297/43416

ペルシャ湾沿岸地域の近現代史研究

佐藤 尚平

本稿は、ペルシャ湾（ペルシア湾）の湾岸地域の近現代史研究を取り上げる。筆者の近況報告をして欲しいというご依頼を頂いたので、筆者自身の関心というごく狭い窓を通して、ここから見える景色を紹介したい。

筆者自身の個々の研究についてはそれぞれ拙稿があるので言及を避けて、本稿では、むしろ普段は直接筆を落とすことの少ない問題意識、研究の奥にある隠れたテーマに焦点を当てる。筆者の関心を一言であらわすと、「分断を乗り越えたい」ということである。この地域・時代についての歴史研究には、いくつかの分断がある。以下、順にみていこう。

一 ペルシャ湾呼称問題

まず地域の名称からして、「ペルシャ湾」という呼び方自体が議論的となっている。現在、ペルシャ湾は、八つの国家に囲まれている。北から反時計周りに、イラン、イラク、クウェ

ート、サウジアラビア、バーレーン、カタール、アラブ首長国連邦、オマーンである。このうちイラン以外がアラブ諸国であるが、こちらでは「ペルシャ湾」ではなく「アラビア湾」という言い方が好まれる。他方、イラン（ペルシャ）側は反対の立場をとる。こうした呼称問題は、この地域におけるアラブ側とイラン側の緊張関係を如実にあらわしている。この分断を解決するために、中立的な響きのする「湾岸」あるいは「湾岸地域」という呼び方が採用されることも多いが、単に固有名詞を一般名詞に置き換えることでは本質的な解決にはならない。例えば、日本語で「日本海」と呼ぶ海の名称が問題になった時、この海の名前から「日本」をはずして単に「海」と呼べばそれで事が解決して東アジアの国際関係が進展するわけではないだろう。

こうした問題は、歴史研究にも影を落とす。例えば筆者は、ペルシャ湾岸の南側、アラビア半島のいくつかの国の独立過程を研究している。特にドバイを擁するアラブ首長国連邦、サッカードで有名なカタール、そしてF1グランプリで名前のあがるバーレーンの歴史に注目している。このうちアラブ首長国連邦はイランとの国境紛争を抱えており、バーレーンに至っては国土全てについてイランが領有を主張して独立そのものを認めようとしなかった経緯がある。このような歴史を抱える地域の研

究は、研究者の政治的な立場によって議論が変わる傾向がある⁽¹⁾。その一方で、実際に一次史料を読むと、分断された歴史像とは異なる状況も浮かび上がってくるのが歴史研究の醍醐味でもある。

言い換えれば、分断してみえる「過去」は、実態としての過去ではなく、「現在」の政治的意識を投影した「過去」⁽²⁾なのではないか。これは、過去に何の分断もなかったという意味ではない。しかし、現在の政治的な意識によって、特定の分断が強調され過ぎていてのではないか。後で述べるが、アラブ・イラン（ペルシャ）の分断以外にも、いくつかの分断がある。過度の分断を乗り越えるためには、新しい見方が必要なのではないか。そのような問題意識が筆者の研究を支えている。以下では、そのうち二つの研究テーマを紹介する。

二 帝国と国民国家

筆者の一つ目のテーマは、先に述べた三カ国（アラブ首長国連邦、カタール、バーレーン）の独立過程をどのように理解するかということである。この問題を理解するためにはまず当時の歴史的背景を知る必要がある。

話は二〇〇年前に遡る。しかも意外な国が登場する。イギリスである。一九世紀初頭のイギリスの一つの課題は、帝国の要

たるインドとの通信・通商の安全性をいかに確保するかということであった。このイギリスとインドを結ぶ航路の一つが、実はペルシャ湾を通っていたのである。それまでイギリスはペルシャ側とオマーン湾（ペルシャ湾からインド洋に通じる出口）のマスカットに商館等を置くだけで、ペルシャ湾の南側は敬遠していた。そこは「海賊」がはびこる「海賊海岸」だとみなしていたからである⁽³⁾。この見方に果たしてどの程度正当性があったのかはさておき、業を煮やしたイギリスは艦隊を派遣し、武力による解決を図った。そしてこれ以降、段階的に片務的な和平条約を重ね、この地域を政治的・軍事的傘下に収めていった。こうしてイギリスは一五〇年以上の間、ペルシャ湾岸のアラビア半島側で影響力を行使し続ける。結局、アラブ首長国連邦、カタール、バーレーンがイギリスの政治的・軍事的庇護から抜け出て独立国家となるのは、一九七一年、第一次石油ショックの二年前のことである。つまり、三カ国の独立過程を理解することは、独立に至るまでのイギリスとの関係を理解することと密接に結びついているのである。そして、ここにもう一つの分断状況が発生する。

分断の一方の極には、三カ国のイギリスとの歴史的な関わりを強調するあまり、あたかも前者が自らの運命について専ら受け身であったかのように理解しようとする研究があり、イギリ

ス帝国史研究に多い。もちろんこれは現在の三カ国の立場からは受け入れがたい。他方、例えばのちにアラブ首長国連邦の初代大統領となるザイド・ビン・スルターン・アール・ナヒヤーンの役割に注目する論者もいる。アブダビのザイド首長が独立に関する全体の交渉を取りまとめた、というナショナルな語りである。

しかし、帝国史的な議論にも、ナショナルな語りにも、共通した限界がある。実は、三カ国の独立に至る決定的な転換点となる一九七一年七月の一週間にわたる交渉については、十分に明らかにしていないのである。筆者は、現在この「空白の一週間」についての実証研究を進めている。

三 国境線と自然環境

一方、三カ国の独立過程についての研究を進めているうちに、一つの疑問に辿り着いた。それは、国境線の問題である。

三カ国が独立する過程で繰り返し交渉の焦点とされたのは、国境線をどうするかということである。三カ国の間、さらには他の国との国境線をどのように引くか。国境線は、一見技術的な問題のように見えるかもしれない。しかし、現実には空間を区分する単なる線ではない。それは、人間社会の単位としての国家を定義する輪郭であり、さらに言えば、人間社会を分断す

る最たる制度・規範・概念である。また別の角度から見れば、人間社会を自然環境によって規定する行為でもある。

地図帳でみると、アラビア半島の国境線は直線が目立つ。一見すると、欧米列強や石油会社が恣意的に引いたようである。

欧米列強が引いた国境線が、世界各地の民族を分断し後々の民族紛争の火種となった⁽⁴⁾というのは、もはや定説とも言える支配的な見方である。しかし筆者が研究対象としている地域の場合、ことはそう単純ではない。例えば、自然環境に規定された現地社会の慣習も大きな意味を持っていた。特に筆者はオアシス地帯に注目している。砂漠に点在するオアシスの水資源分配にかかわる伝統的な慣習が、国際交渉や紛争の中でどのように解釈されたのか。また、例えばオアシスを分断するように国境線が引かれた場合、それは後々の現地社会にどのような影響を残したのか。この研究はまだ始めたばかりで手探りが続いているが、オーラル・ヒストリーなどの手法も取り入れながら進めたい。

▼注

(1) こうした問題について先進的な取り組みを行っている研究者として、ローレンス・ポッター(シリ・ポッター)がいる。アラブ系、イラン系、欧米系など様々な出自の研究者を集めて編んだLawrence G. Potter (ed), *The Persian Gulf in History*, Basingstoke: Palgrave Macmillan,

2010を参照。

- (2) このような状況は、バルシヤ湾岸地域の歴史に限ったことではない。分断の多いこれまでの歴史叙述を反省し、世界中の歴史家が模索を続けている。「グローバル・ヒストリー」と呼ばれる潮流も、そうした試みの一つである。さらに先鋭な立場を取る者のなかには、統合的な世界観を構築すること自体を歴史叙述の目標に据える研究者もいる。羽田正『新しい世界史へ——地球市民のための構想』岩波書店（岩波新書）、二〇一一年などを参照。

- (3) 実際にこの地域を拠点に活動していた人々が「海賊」だったのか、あるいは、海賊とまでは言えないにせよ、その人々の活動の「賊行為」に該当するものだったのか。こうした問いは、のちに成立する国家の起源にもかかわる問題であり、未だに結論は出ていない。このテーマを端的にまとめたものに、鈴木英明「カワシム海賊」の創造とバクス・ブリタニカ』『UAE』五一号、二〇一二年、二七―二九頁がある。

- (4) 例えば、網中昭世「アフリカ諸国の直線的な国境線の成立の経緯について教えてください」『歴史と地理』六五九号（『世界史の研究』二二三号）、二〇一二年、四六頁。

（さとう） しょうへい／金沢大学人間社会研究域法学系准教授